

審査員講評

■日本画

評 温井 喜央

昨年より応募作品が増え、いずれの作品も新鮮な発想と感性に溢れており、充実した作品に感じられました。

市展賞「繚乱」は、50号の大作で構成力・色彩感覚共に素晴らしい。画面中央上に描かれた赤い花が画面全体を美しく感じさせています。市長賞「熱帯雨林」は、洋画的な感覚で表現方法も面白い作品です。画面下の明るい色が森の色を美しく見せ、効果的に描かれています。飛騨市制20周年記念賞「天生の森」は、鼠・胡粉などで作品全体を抑え雰囲気を作り、下の部分の花や草を丁寧に表現されていることで作品全体が美しく完成度の高い作品になっています。

評 北平 真由美

今年もていねいに描かれた作品が多く、努力のあとがうかがえます。

市展賞の「繚乱」は、とても美しい色調が目にとまりました。たくさん色相が使われているにもかかわらず、よくまとまっています。装飾性があり、不思議な世界観が印象的です。市長賞は、個性的な描写がうっそうとした熱帯の空気を面白く表現している点が良かったです。植物の形が単調なのが少し残念です。多様な形の葉が密に重なり合うように構成されれば、より、ジャングルになったでしょう。そして、もっと大きい画面で大胆に挑んでみて下さい。更なる魅力が引き出されることでしょう。奨励賞、佳作についても、しっかり絵の具が重なり、重厚さが感じられます。色みの幅が少ないので、多くの色を使ってみて下さい。奥行のある作品になると思います。

今後、多くの力作に期待しています。

■洋画

評 戸部 善晴

今年度は以前より、自分の世界観を表現した作品が多くなり、個性豊かな作品が目立ちます。

市展賞「檻」は、社会情勢・心の孤独感等、現代の人々が実感しているすべてを集約し、直線と曲線により画面構成され、表現豊かなマチエールで描かれています。市長賞「嵐の前日」は、上半身ヌードの女性が室内に描かれ、起こる事に対して立ち向かう気持ちの強さと予感が、光と影により室内の情景を強く表現しています。青年の部、奨励賞「りんご」は、モチーフの力強さが画面から伝わって来る力作です。「静物」は、色彩豊かに、光を美しく描かれています。「卓上の静物」は、力強く描かれてはいますが、モチーフの配置を注意すれば、もっといい作品になります。

評 赤井 健治

猛暑の中での制作、敬意を表したいと思います。

飛騨市制20周年記念賞「Departure」、斬新な作品で眼に飛び込んできました。試行錯誤されたあとがみえます。天と地、大きな世界を描いて、見る人の心を和ませます。これからどんな作品が出来るのか、楽しみです。奨励賞「紅葉」、紅葉の美しかった印象を画面いっぱい表現し、好感もてる作品になっています。この美を感じた気持ちを大切に、これからの制作に励んで下さい。奨励賞「町を望む」、毎日見ている風景を誠実に描かれ、力量のある作品になりました。身近な風景又は、影像是、自分の中に深くとけこんで、確実に作品に現れると思います。大切に描き続けて下さい。

■書

評 岡本 杏華

青年の部は、本年出品数昨年度より、8点増えました。賞の選別に審査の重みを感じました。奨励賞の「臨曹全碑」は、隷書特有の波磔共に美しく運筆も軽快です。「臨蘭亭序」は、行書の丁寧な筆致で、気品に満ちた作品です。全体的に、調和のとれた意欲的な作品が多く、古典を血肉に書を追求し、来年度更に頑張ってお下さることを期待しています。

評 今寺 千景

今年は昨年度より作品数が増え、漢字・仮名いずれも練度の高い作品が出品されました。市展賞の「もみぢ葉の」は、和歌2首の大字仮名の作品です。構成・墨の潤渇・行の流れと余白の美しさ共に秀で、完成度の高い作品となりました。市長賞の「漢 金文」は、半切2行の篆書の臨書作品です。遅速・抑揚のリズムを効かせた運筆から生まれる線の細太、一文字ずつの造形美も魅力的で更には全体を白と黒のコントラストが美しい作品へと高められました。飛騨市制20周年記念賞の「臨傳山行書」は、2尺×8尺の3行作品です。原本の自由奔放な筆致をよく捉えて臨書され、傳山のかおりを漂わせた躍動感のある大作にまとめられました。

■彫刻

評 森田 一成

市展賞「時を超えて」、風化した建築用の木材と錆びた金属を組み合わせた作品。材料選定がおもしろく、何に使われていたものなのかなとじっくり観察してしまいます。それぞれの材料には不要な加工を加えず、配置とバランスだけで魅せる作品に仕上げたセンスある作品になっています。市長賞「愛する日本」、「熊」を段ボールと紙で造形した作品。口周りの作り込みと前傾姿勢が飛びかかってきそうな勢いを見せています。足元の台には日の丸と鎖、お腹には造花、口の中の奥には取扱注意の文字がみえます。愛する日本というタイトルから、作者の何らかの強いメッセージを考えさせられます。飛騨市制20周年記念賞「パワー」、2種類の木彫を組み合わせた抽象作品。地面で逆立ちをしながら、足で人を持ち上げているような造形に見えます。土台になっている側はひねりながら足を上に押し出すような力強い形状で、上に乗っている側は反りながら流れていくような軽やかな造形になっています。2種類の違った造形の組み合わせがおもしろい作品です。

評 松本 弘司

市展賞「時を超えて」は、素材の魅力をいかんなく発揮した作品です。経年変化したホゾや錆びた和クギなどを使い、台から浮かんだ空間を作り、抽象彫刻としての強い表現に感心します。市展賞の「愛する日本」は、全国で起きているクマの出現を、クマの心情から語っている作品として伝わってきます。もう少し工夫されるのなら、腹の辺りにある造花がクマと同じ紙の素材で作られると、作品としての一体感が出ると思います。飛騨市制20周年記念賞の「パワー」は動きのある彫刻として良く表現されています。台と接している立ち上がりの丸い形に、シャープな表現があるともっと良くなるような気がします。奨励賞の「水辺の合奏団」は、彫刻というジャンルで音（メロディ）を表現する新しさがいいと思います。もう少し動く彫刻としての表現を求めるなら、手回しの回転する円盤を不定形な形の連続にするとまた違う動きのおもしろさが出るのではと思います。佳作の「難破」は、焼け落ちるようなイメージがこちらに伝わってきます。入選作2点の木彫からは、すなおに作られていて好感が持てます。

■工芸

評 阪口 浩史、下坂 邦和

工芸は自然の素材を人の手（技術）と個性によって生かす事により成り立ちます。自然豊かな飛騨の地には様々な素材があり、それらを生かした作品がもっと多く出展されることを願います。

市展賞の「リーフ・アート飛葉」は植物を金銀の箔のように仕立て上げ、貼り付けています。背景のグラデーションと植物の配置バランスが見事で、迫力を感じる作品です。市長賞の「アメ釉円柱花器静閑」はロクロとタタラ板成形を合わせて造形されています。縦長の形に上部は厚く施されたアメ釉が流れ、焼物としての素材感が生かされています。飛騨市制 20 周年記念賞の「和」は数種類の木材を用い、それぞれの木目や木地の色など、その特長が生かされています。静かに落ち着いた空気を感じる作品です。

■写真

評 北口 秀夫

市展賞「溪流華やぐ」、溪流に降り注ぐ光芒を見事に映しています。手前に大きな木の幹を入れた構図は素晴らしく、画面に遠近感を出しています。作者のカメラポジションの取り方に高い技量がかがえる秀作です。市長賞「炎のだるま供養」、画面いっぱいに焼かれるだるまを入れ、炎がつく初期段階でシャッターを切ることにより、だるまの目玉が力強く描写されています。煙の向こうの家族だろうか、幸多い1年の感謝の願いが伝わります。飛騨市制 20 周年記念賞「共に生きる」、樹根の間に咲くショウジョウバカマが可憐に咲いています。うねった樹の根は力強く、リズム感も感じられます。作者の観察力の旺盛さがうかがえます。奨励賞「抜け道」、路地から、表に通る人物をグッドタイミングでシャッターを切っています。通りが明るく、より路地の奥行き感が出ています。手前に防災ヘルメットを入れたことで、生活通路だということがわかります。床の石畳み、板塀の質感が良いです。題名は、鑑賞する人が作者の想いを膨らませてくれる題としたい。奨励賞「親子の時間」、夕日のきれいな写真です。もう少し子供が親にまつわるタイミングを待って、シャッターを切りたいところです。親子の親近感が出た写真になっただろうと思います。

評 安田 保郎

写真は自己の表現、感じたものをいかに表現するかである。作者の狙い、表現したいもの、ドラマ性のあるものが大切です。

市展賞「溪流華やぐ」は深山幽谷に差し込む光芒であるが、点在する岩、水の流れ、手前の古木など、奥行感があり露出・構図など、素晴らしい作品でありました。市長賞「炎のだるま供養」は本人の思い出深いだるま供養に家族で見送る人の思いが伝わり、迫力ある作品となっています。飛騨市制 20 周年記念賞「共に生きる」は古木の巨大な根の間に可憐な花が咲き、新旧の対比をなし、共生の様子が良いバランスで捉えられています。奨励賞「抜け道」は小さな通路から奥の通りへ傘をさしての人物を入れた、小さくてもクローズアップ効果のある秀作です。奨励賞「親子の時間」は夕暮れの海岸の親子のシルエット、二人の愛情がもう少し表現されると更に良いと思います。入賞には至らなかったが独創的で個性のすぐれたものもあり、もう少しの工夫で良い作品になったと思われます。